

# ボランティヤ活動グループ訪問記

「コロナ禍でも定例会や学習を続け  
新しい技術や情報を取り入れている  
筆記通訳サークルもみじさん



今月の「ボランティヤ活動訪問記」も、メールでの取材となりました。

ほかほかふれあいフェスタで、毎年一緒にイベントを企画・開催させていただいている「筆記通訳サークルもみじ」さんを訪問し、会長の山下善子さんとほかほかふれあいフェスタ担当の小飯塚敏子さんに、筆記通訳をしようとする方へのアドバイスを伺いました。

Q1、要約筆記について簡単に教えてください。お話を要約を文字にして聴覚の不自由な人が伝わるようにして知っていますが、他に？

聞かれない方も聞かれない方は手話のコミュニケーションするだけではなれないような方法を使って情報を得ています。要約筆記はその方法の一つで、その場の音の情報を別の場で文字にして伝えることができます。



小学校での打ち合わせ

会場のスクリーンに投影して多人数に伝える方法と、少人数の利用者のそばで情報を伝える方法があります。パソコンを使う方法と紙やボードに手書きする方法があり、利用する方法のご要望に合わせて対応しています。主に難聴者や中途

失聴の方が利用されています。

Q2、会の成り立ちや名前の由来、また活動拠点などがあれば教えてください。また、会が発足したのはいつ頃でしょうか？

平成7年（1995年）11月、社会福祉協議会主催の要約筆記ボランティア講座を修了したメンバーがサークルを立ち上げました。「もみじ」のようなかわいい手で書いて伝える」が会の名前の由来です。発足当時は、要約筆記というものがまだあまり認識されていなかったため、行政に講演会などに要約筆記をつけるよう働きかけたり、情報誌に活動を取り上げていただいたり、要約筆記を知ってもらうため様々な苦労があったと聞いています。

「聞こえない不安をお持ちの方々が文字情報でその場に参加する喜びと自信を得るお手伝いを」という結成当時から変わらぬ志を受け継ぎ、努力を続けています。活動拠点は、あじさい会館の会議室等を借りて定例会を開いています。

Q3、会員は何人くらいいますか？ 定期的な研修があるのでしょうか？

現在会員は37人です。要約筆記者養成講座を修了した者が主な会員ですが、難聴者や結成当時からの大先輩も在籍中です。交流を通じてノウハウや工夫、改善点などを共有しています。

毎月2回定例会を開いて情報交換や話し合いなどを行い、技術研鑽のための実技練習として音源を聞きながら書いたり、入力したり、手書きとパソコンにわかれて練習をしています。また、年に1回程度、外部から講師をおよびして講演会なども企画しています。これまで他地域で活躍する要約筆記者のお話を聞いたり、音声を遠隔で文字変換する技術を学んだりしました。

## Q4 活動の中心はなんでしょうか？

現在、もみじとしての活動の中心は社協みんないひと体験講座です。小中学校へ難聴者と一緒に出かけて行って、生徒の皆さんに「書いて伝える」ことを体験してもらいます。毎年25校程度訪問しています。災害が起きたとき、電車が止まったとき、放送があっても聞こえない人には伝わらません。情報を書いて伝えるよう体験してもらっています。このような活動から聴覚障がいへの理解が少しずつ広まってほしいと願っています。

その他に大学で学び、聴覚障がい学生へのサポートイキもあります。コロナ禍で小中学校へも大学へも行かなくなっています。これから私たちの活動内容も変化していくと思われれます。どのような形でも工夫しながら続けていきます。

Q5、ほかほかふれあいフェスタにも参加していらっしゃいますが、そのときの体験などを具体的に教えてください。

ほかほかふれあい、磁気ループの利用を広めたいので協力をいこうとで参加したのが始まりです。聴覚障がい者支援団体の参加がそれまで無かったこと、もみじはあじさい会館で活動しているの、ここまで続けてきました。



2020年度ほかほかふれあいフェスタ特別イベントで

最初は磁気ループ体験コーナーと手書きの体験コーナーでしたが、今は手書きとパソコンの体験コーナーをやっています。両コーナーとも、楽しんで体験してもらええるようにごく簡単なことを聞きながらOHCで書く、またはパソコンで入力し、それをスクリーンに映します。慣れた方なら文章を打ったり書いたりしてもらいますが、名前だけが感想を書くとか、様々です。

広く市民の皆さんに要約筆記を知ってもらいたいので、その入り口にならばと思っております。

〇〇、コロナ禍で活動が大幅に制限されてしまった中、でも新しい発見や前進を味わっているお聞きしました。簡単にお聞かせください。

今年度は、コロナ禍で大幅に計画を変更しましたが、定例会と学習は細々と続けています。昨年7月からZoomで定例会を始めました。最初は画面上で顔を合わせるだけでも満足でしたが、今は画面共有を使いながら学習もやっています。会議が使えるときは、会場に来てくれるメンバーとZoom参加のメンバーが一緒に話し合ったり、技術的なことも相談するようになってきて、良かったです。集まれないという状況のなかで、Zoomの使い方方も上手になり、離れた場所においてもペアになって情報保障が出来る方法を学びながら、新しい技術や情報を取り入れることができました。このように意欲的に取り組んで頼もしいメンバーが育っています。

(植野)

